慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	翻訳 国富論 : 国富論書誌続篇
Sub Title	
Author	三邊, 清一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1943
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.37, No.9 (1943. 9) ,p.849(69)- 879(99)
JaLC DOI	10.14991/001.19430901-0069
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19430901-0069

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

尙ほかゝる計算例は具體的數字を用ふることにとつて其の相互の關聯を明瞭ならしめ得るのであるがこゝにはその餘白もないからして、軈て、本委員會に於ける調査の全體の結果を譯出し近い將來に刊行する豫定である。

翻譯『國富論』

——國富論書誌續篇——

三邊清一郎

一

アダム・スミス『國富論』は、ストラアン、カデル父子、及びW・デヴィスによつて出された倫敦版を正統とすれば、それ以外の出版者によるものはこれを異版と稱すべく、著者の許諾なくして出版されたものは、僞版となすべく、その夥しい版數は、鄕國に於ける思想界の指導的役割を表徵する。註そしてまたこの國内に於ける夥しい出版がその後世への影響を示すものとすれば、國外への反響は、正にその翻譯書がこれを反映すと言ふべきであらう。

註　三田學會雜誌、第三十六卷、第九號、小稿「國富論書誌」

一七七六年「國富論」が出版される時、スミスの周圍の人達は、それが軈がて佛蘭西語に移されることを期待した(W. R. Scott. A manuscript criticism of "The wealth of nations" in 1776 by Hugh Blair. In "Economic history," 1938. Feb. p. 52)。しかしその最も夙い外國譯は佛蘭西で出されなくて、獨逸語で公にされた。後に述べるJ・F・シラアの譯がそれである。佛蘭西では前に「道德情操論」の翻譯を出したこともあるブラヴェが一七七九年一月より翌年十二月まで「農業商業財政及び藝術新聞」Journal d'agriculture, commerce, finance et arts に國富論の翻譯を連載した。この翻譯は一七八一年及び一七八八年に匿名で單行本に纒

めて上梓された。Recherches sur la nature et les causes de la richesse des nations. Traduit de l'anglois de M. Smith. のイヴェールドン Yverdon 版六卷本及び倫敦巴里版二卷本がこれである。前者には編者の稍〻長い序文が附してあり、その中で本版上梓の由來を次のやうに書いて居る、「この『研究』が英吉利に現はれた時、學者雜誌（ジュルナル・デ・サヴァン）で巴里に知らされたが、これを翻譯する、況してやこれを出版する勇氣あるものがあるとは、思ひも及ばないことであつた。これを吾々の不幸な浮薄さのせいにするのは間違ひである。この缺點は傳染するとしても、世間全般に及ぶことはない。この仕事を實行する充分學殖ある、充分公益に献身的な學者があつたのである。吾々はこの學者が分割して發表しなければならなかつたその勞作の各部分を接合して、彼れを助けねばならぬと考へた。でなければ、スミスの著作は、利用することも、それに就いて正しい觀念を形成することも、困難であらう。」（p. vi）後者には、この序文の多少省畧したものが附されて居る。これによつて知られるやうに、この兩版は、譯者ブラヴェによつて上梓されたのでない。彼れ自身は一八〇〇年「市民ブラヴェ」le citoyen Blavet の名によつて、同じく Recherches sur la nature et les causes de la richesse de nations: Traduit de l'anglois d'Adam Smith, 4 vols. A Paris. を出した。そしてその序文で、この兩版に觸れ、「私はこの翻譯がかの新聞を拔け出る必要あるものとは、曾つて考へなかつた、しかしそれは、完結するや否やイヴェールドンで、前よりも誤謬の多い袖珍六卷本として複刻された。私は長い間それを知らなかつた。然るにそれはまた一七八八年私の知らない間に準備された一新版によつて、この翻譯に相應しい日蔭の境涯から引出された。それはイヴェールドン版以上に損はれて居る。出版書肆は、吾々が既にスミスに懷く高評の御蔭で可なり大部數を賣捌いたが、しかしそれに對する活潑な批評を招いた」と言つて居る（p. ix-x）。實際彼れに對する批評には相當辛辣なものがあつた。モレレエは、先に惡譯で道德情操論を殺した前のベネディクト派の僧（ベ）（ブラヴェ）がその等しい國富論の惡譯で私を出拔いた――彼れもまた國富論の翻譯を企てゝ居たのである――、「氣の毒なスミスは、伊太利の諺 Tradottore traditore に從つて、また翻譯されないで逆かれた」と惡罵を送つた（J. Rae: Adam Smith. p. 338-59.）。ブラヴェはこれ等の批評に應へるために、倫敦巴里版の出た一七八八年十二月（五日）「巴里新聞」に一書を寄せて、それは彼れの意思に反して公にされたものだと釋明した。「それは私が自分のために他人の批評を顧慮しない人の粗畧さを以つて、また原文を正確に譯するために私に缺くるものを總て知悉しながら、譯出したものに外ならない。またこれを公にしやうなどとは夢にも思はなかつたのであるが、私の友人であるアメイルホン氏が私にその『農業藝術及び商業新聞』に載せる面白い論文がないので困つて居ると打明けた時、それが甚しく缺陷をもつことを豫め知らせてこれを彼に提供するといふ考へが私の胸に浮んだのである。私はそれはその機會であると共に、私よりも能力のある人を促して、吾々に一層よい翻譯を與へるやう誘ふ、原文の價値を充分知らせる方便であると考へた。かくて彼れはこれをあの通り彼れの新聞に掲載したのである。それは一七七九年一月の後半から一七八〇年十二月の終りまで連載された。（Recherches, tr. par le citoyen Blavet, 1800. Preface du Traducteur. p. ix-x.）ボナーの「アダム・スミス文庫目錄」A catalogue of the Library of Adam Smith に據れば、ブラヴェに、この他に一七八一年 Recherches sur la nature et les causes de la richesse des nations Trad par M. l'Abbé Bl. 巴里版三卷本があり、それがスミスに贈られて居ることが記載されて居る（1. ed. p. 109. 2. ed. p. 174.）。この好意に對してゞあらう、スミスは本譯書の芳ばしくない世評にも拘らず、一七八二年七月二十三日に次のやうな鄭重な手紙を書いて居る。「最近倫敦に滯在中畏友ラムスデン氏から拙著の立派な貴譯と共に貴翰を受取りました。倫敦ではいろ〳〵と忙しく、貴君が私に示された御好意と名譽に對して御禮を申述べる暇もありませんでした。私はこの翻譯を喜んで居ます。貴君は

私の著作を，その鑑賞と批評とを私が最も尊敬する歐羅巴の國民に紹介するによつて、私に著者に示し得る最大の好意を寄せられた。私の處女作の貴君の翻譯はひどく滿足なものでした、しかも今回の翻譯はそれ以上に滿足なものです。私が眼を通した限り（倫敦を立つ前殆んど餘日がなかつたので、全部を讀む時間がありませんでしたが）、それは有ゆる點に於いて、原著と完全に等しいことを見出したといふことを、私は貴君に御世辭でなく言ふことが出來ます」と書いた（Recherches sur la nature et les causes de la richesse des nations. Tr. par le citoyen Blavet. 1800. Préface du traducteur. p. xxv-vii）。

一般には一七八一年のイヴェールドン版が佛蘭西語譯の最初の刊本とされて居る（Homer B. Vanderblue: Adam Smith and the "Wealth of nations." 1939. p. 7.）。しかし實際には一七七八—七九年にくーグで Recherches sur la nature et les causes de la richesse des nations... Tr. de Tanglois de Adam Smith, par M***. La Haye なる匿名の四卷本の翻譯が出版されて居た。ブラヴェ譯に後れて一七九〇—九一年にルーシェの第四版に據る Recherches sur la nature et les causes de la richesse des nations, traduits de Tanglois de m. Smith, sur la quatrième édition, par m. Roucher; et suivies d'un volume de notes, par m. le marquis de Condorcet. が出た。譯者J・A・ルーシェ Jean Antoine Roucher は佛蘭西革命の犧牲として斷頭臺の露と消えた薄命の詩人である。同じ頃「巴里新聞」にルキ王朝の哀みを餘りに強い言葉で表はしたことが、圖らずこの運命に導いたのである。その主著なる詩集「月」Du mois は死後（一七七九年）テェルゴーの文を附して出版された（C.-A. Sainte-Beuve: Causeries du lundi, 4. éd. Tom. xii. p. 132.）。Grand dictionnaire, par Piere Larousse; Larousse du XXe siècle.）。私には本譯の文章を鑑賞する力はないが、ブラヴェは「ルーシェは英語を知らなかつた。その國語を解さない著者を翻譯することは彼れに不可能である。それは私の翻譯の燒直しに過ぎない。彼れは私の譯を机上に常に備へて、それに見出されない增補分を除き——といふのは私の翻譯は英原本第一版に據つたのだから——、それを通辯として役立せたのである。」彼れは私の翻譯の不評に乘じて、家計を扶けるために試みたものであると、ひどく扱き下して居る（Recherches sur la richesse des nations. Tr. par le cytoyen Blavet. 1800. Tom i Preface du traducteur. p. xiii, xvii.）。それにも拘らず本譯書は一八〇二年ガルニエの譯が出るまで私の知る限りでは四回版を重ねられ、佛蘭西人の國富論に對する關心の深さを示して居る。ルーシェは一七九二年のヌーシャテル版の序文で、「國民議會が、互ひに相反する行政制度の衝突の繼續と長い間の亂費、公金消費によつて浪費せられた公共の富の再建の方法に努力しつゝある今日、殊に本譯書の要求せらるゝ」ことを言つて居る（p. vii）。本譯の初版にはコンドルセーによる註を收めた一卷が續刊されることが記載されて居るけれども、それは出版されてない（Recherches sur la richesse des nations par G. Garnier. 5. éd. P.X.）。また九一—九二年の新版には "Nouvelle éd., augm. d'un discours préliminaire et de notes, avec une traduction complete des Économiques de Xénophon, par m. de Fortia." の記載があるけれども、このゼノフォンの譯も載つてない（The Vanderblue memorial coll-ection of Smithiana. p. 24-25.）。九四年の巴里版は、どんな理由によるものか「再版」Deuxième édition, revue et considérablement corrigée... Paris, chez Buisson, an 3°. de la République として刊行されて居る。

ブラヴェに國富論の翻譯を出拔かれたと言つたモレレ Abbé Morellet もシヤルバーン卿を通じて著者から國富論の進呈を受け、その譯出に從つて居たのであつた（J. Rae: Adam Smith. p. 359.）。彼はエルヴェシュスの食卓でスミスと識り、佛蘭西に於ける最も親しい友人の一人となつたそのよき理解者であつた。彼は哲學者であると共に經濟學者であつたから、彼は主として經濟上の問題すなはち「商業、銀行、公債の理論、及び當時スミスが考へて居た大著に於ける樣々の點」に就いて論じ合つたのであつた。彼は後にスミスを「私は彼を、自ら論ずる總ての問題を最も完全に觀察し分析する人々の一人であると今なほ考へる」と言つた（Ibid. p. 201.）。かくして彼は國富論の佛蘭西への紹介者と

しては最も適した人であつたのである。而して彼自身もそう信じ(Ibid. p. 359.)、スミスも亦彼の翻譯を最も期待して、彼が「見たいと切望するアベ・モレレエの佛蘭西譯に就いて何も知らせない」カデルの懈怠を責める手紙を、一七八四年の八月十日及び十一月十八日に二度も書いた程であつた(W. R. Scott: Adam Smith, p. 291; E. Cannan: Two letters of Adam Smith, in "Economic Journal," vol. VIII, 1898, p. 403-04.)。けれども、遂に出版者を見付けることが出來なくて、一八〇二年にガルニエの名譯が出るに及んでその計畫を全く放棄した(J. Rae: Adam Smith, p. 359)。

スミス生前に翻譯されて彼れを最も喜ばせたものは、恐らく一七七九—八〇年コペンハーゲンで出版されたF・ドレビイによる丁抹譯 Undersgelse om national-velstands natur og aasag... Af det Engelske overset og med nogle anmarkniger oplyst af F. Draebye. 1779-80. 2 vols. であらう。譯者フランツ・ドレビイ Frantz Droeby は一七四〇年コペンハーゲンに生れ、後に同市駐在の諸威通商局の書記となつたひとである。一七六六年諸威のクリスチアナ（今のオスロ）にての町の豪商ジエームズ・コレット James Collet の家の防添教師として赴き、その息二人と七三年から佛蘭西及び獨逸に遊び、一七七六年には英吉利に渡つて暫くその地に留つた。恐らくその際原著の刊行を知つてその翻譯を志したのであらう(W. R. Scott: Adam Smith, p. 280, note.)。彼れは本譯の再版を考へて居たものと見え、アンドレアス・ホルトを介して、原著者が如何なる變更を考慮しつゝあるか照會して來た。彼れは原著が既に一七七八年に版を重ねて居たことを知らなかつたのである。これに對しスミスは、ストラアンには「これに對する最も簡單な返事は、第二版を贈る」ことであると言つたに過ぎなかつたが(J. Rae, Adam Smith, p. 358)、ホルトには「ドレビイ氏が私に私の著書を丁抹語に翻譯する特別の名譽を加へられたと聞くのは、私に最大の喜びを與へる。貴君から私の最も眞摯な感謝と最も謙虚な敬意とを傳へて戴きたい。私は不幸にして丁抹語を解しないので、氏の翻譯を讀む喜びをもち得ないのは誠に殘念です」と極めて丁重な手紙を認め、第二版に於ける訂正に就いて親切な注意を書き送つたのであつた(W. R. Scott: Adam Smith, p. 280-81.)。

佛蘭西では夙くから幾多の翻譯が行はれたが、しかし最も優れたものは、一八〇二年ジエルメン・ガルニエ Germain Garnier によつて公にされた。Recherches sur la nature et les causes de la richesse des nations; par Adam Smith. Traduction nouvelle, avec des notes et observations; par Germain Garnier, de l'Institut national. Avec le portrait de Smith, Paris, 1802. がこれである。全五卷。第一卷に「一、スミスと佛蘭西經濟學者の學說比較概要。二、スミス著作研究便法。三、同著者による佛英兩國の富の比較」を含む長い序文 (pp. cxii) と、スミスの生涯及び著作註解を附し、第五卷はその全部を四十二項より成る自註と索引に當てた。彼はその序文で「スミスは結果に於いて最も收穫の多い、實際に最も有用な、經濟學の有ゆる原理の根源であり、富の發生と分配の秘密を隅なく彼れに露呈した一大眞理を發見した」と言ひ、スミスと佛蘭西經濟學者の學說の差異は、「これは富の本源を土地に遡り、かれはこれを生ずる一般的要因を勞働に求める」その主張の既に出發點に在ると考へる。「勞働は一の力である。人間はその機械である。この力の增進には、無限な人智と勤勉を除き殆んど限界はあり得ない。それは、これ等の能力と同樣に、意思によつて導き、思索の助けを藉つて完成し得るものである。これに反して土地は、勞働が自然とその生產量に及ぼす影響を考へないならば、些かたりともそれを有用ならしめ得る有ゆる點に於いて、すなはちその廣袤に於いて、その位置に於いて、及びその物理的組成に於いて、吾々の如何とも致し難いものである。」かくて「經濟科學は、佛蘭西經濟學者の見解に從へば、純粹に思索的な、その研究對象を支配する法則の認識以外を目的とし得ない自然科學の部類に入り、スミスのそれに從へば、この科學は、その傾向として對象を改善し、そ

の許す最高の完全さに到達させる、他の道德科學と結びつく。」(Preface. p. xvii-xix.)。そしてまた「研究便法」では、「富の形成、增殖及び分配に關するスミスの全學說は、擧げて最初の兩篇に含まれる。殘りの三篇は、彼の所說を強固にし發展さすことは疑ひないけれども、これに加ふるところのない三枝論として、別々に讀んで差支へない」と敎へてゐる(Preface. p. xxvi.)。

この序文は前に述べたやうに、間もなく逆に英語に移され、英國に於いて出版された幾多の版に收められた。またこの版にタッシイ作の著者肖像が初めて揭げられたことは注意していゝかも知れぬ。この點ではそれは一八〇五年のグラスゴウ版に先立つてゐる。再版は一八二二年全六卷として上梓された。更に一八四三年にA・ブランキにより、ビュキャナン、G・ガルニエ、マカラック、マルサス、J・ミル、リカアドオ、シスモンディ、J・B・セイ等の評註を附した第三版が、「主要經濟學者著作集」Collection des principaux économistes の第五、第六卷として、また一八六九年には右に更にJ・ガルニエの訂正を施して第四版三卷が、「道德及び政治學全集」Bibliotheque des sciences morales et politiques. の一部として出版された。そして一八八〇—八一年には「第三及び第四版が絕版となつたので、若干の修正を加へ、新たに「主要經濟學者著作集」の一部として上下兩卷——第一卷が八一年に、第二卷が八〇年に出版された——の第五卷がパリで公刊された。本版ではG・ガルニエの有名な「長序は最早有益と思はれなくなつた」といふので削除し、その代りにJ・ガルニエが第四版に附した短い序文と國富論「分析的概要」を卷頭に置いた。

二

獨逸人が國富論の翻譯に示した關心は最も夙い。J・F・シラア(Johann Friedrich Schiller又は Schirller に綴る)の "Untersuchungen der Natur und Ursachen von Nationalreichthümern von Adam Smith, Bey der Rechte Doktor, Mitglied den königlichen Gesellschaft der Wissenschaften zu London und ehemaligen Lehrer der Moral philosophie auf der Universität zu Glasgow. Aus dem Englischen. Erster Band. Leipzig, bei Weidemanns Erben und Rech, 1776, 第一卷が一七七六年の春ライプチヒから出版された(Carl William Hasek: The Introduction of Adam Smith's doctrines into Germany. 1925. p. 63.)。「國富論」そのものがこの年の三月に公にされたのであるから、彼れが倫敦に住んだと傳へられる(Göttingische gelehrte Anzeigen. Aug. 22. 1778. p. 544.)ところから考へて、この譯は何等かの便宜によつてアドヴァンスド・コッピイに據つたのであらう。J・C・H・フェダァ J. C. H. Feder は原文と照合して「いゝ譯だ」と評したが(Göttingische gelehrte Anzeigen. March 10, 1777. p. 240.)、しかしG・ザルトリィウス G. Sartrius は「シラアの譯は、この批評家の言ふやうに必ずしも正確でない。しかし原文がひどく難しいのだ。用語が專門的で、法律的表現が用ひてあるから、英國人にさへ難解で曖昧なのである」と言つてゐる(Göttingische gelehrte Anzeigen, Oct. 19, 1793. p. 1661. C. W. Hasek: the Introduction of Adam Smith's doctrines. p. 63. note 4.)。ロッシェルはブラヴェの佛譯にも劣る惡譯だと扱き下してゐる(J. Rae: Adam Smith. p. 350; Wilhelm Roscher: Geschichte der National-Oekonomik in Deutschland. München, 1874. S. 598.)。第二卷は一七七八年に公にされた。第一卷には序文がない。東京帝國大學經濟學部研究室に藏せられるスミス文庫に献呈本らしい美裝の第一卷が收められてゐるのと、第二卷序文に「尊敬すべき『道德情操論』の著者の個人的知遇と友情とは譯者の幸せとするところである」旨を述べてゐるところから、兩者の間には通常著者と譯者との間に見られる位ゐの繫りはあつたのであらうと思はれる(Untersuchung der Natur und Ursachen von Nationalreichthümern von Adam Smith. Übersetzt. von J. F. Schiller. Bd. II. 1778. Vorbericht. S. v-vi.)。また第二卷に附錄として原著第二版(一七七八年一月に出版された)の訂正を載せることを約束してゐるけれども、それはこの版では果されてゐない(Ibid. Vorbericht. S. V; 猶は James Bonar: a Catalogue of the Library of Adam Smith. 2. ed. 1932. pp. 172-73; Appendix iv. 參照)。一七七六—九二年版第三卷(一七九

二年）に收められてあるといふ國富論第三版增補分の翻譯「諸國民の富の性質及び原因に關する研究第一版の增補訂正分」Zusätze und Verbesserungen zu der ersten Ausgabe der Untersuchung der Natur und Ursachen von National-reichtumern. が或はこれに當るのかも知れない（三田學會雜誌第三十六卷第九號、小稿「國富論書誌」四參照）。W. Roscher: Geschichte der National-Oekonomik in Deutschland. S. 601; The Vanderblue memorial) 。本書は初め實れなかつた。一七七六—七八年二卷本、一七七六—九二年三卷collection of Smithiana. p. 26. 註

本といふ出版の仕方はこの事實を證じてゐるやうに考へられる。出版者であるワイデマン Weidemann が賣行の捗々しくないことを歎き、ザルトリウスが「スミスは實れ殘ることはない、最後の勝利を得るものは理性だから」と慰めたといふ話が傳はつてゐる（W. Roscher: Geschicht der National-Oekonomik. S. 601.）。

註　一七九二年の「增補分翻譯はこの版の第三卷第一部を成すのであつて、出版者の序文は同卷第三部として、一七九〇—九一年版のルウシェ譯に約束されたコンドルセの註を譯出すべきことを豫告してゐるといふことである。——The Vander blue memorial collection of Smithiana. p. 26.

このやうに「國富論」に最も夙く關心をもつたものは獨逸人であつたが、著者そのものはこの國では一般に、一七九四年ガルヴェ譯の出る頃まで殆んど顧みられなかつた。ロッシアーは、この期間に出版された經濟文獻中國富論を紹介するものなく、また彼れの名に言及するものも殆んどない。偶々これを擧げても重視してないと述べてゐる（Ibid. S. 601-02; John Rae: Life of Adam Smith. p. 360.）。獨逸はこの頃フレデリック二世の治下に在り、官房學派が全盛を振つてゐたからである。唯々ゲッチンゲンに英吉利の制度を讃美する有力な一派があり、一七七七年三月十日の「ゲッチンギッシェ・グレールテ・アンツァイゲン」Göttingische gelehrte Anzeigen に、そこの大學の哲學教授G・H・フェダアが本書を「これは古典である。基礎的な、あまりに政治的に局限されない、屢々達見を示す哲學書としても、また幾多の詳細な歷史的說明としても、極めて價値の高い書である」と評した（W. Roscher: Geschichte der National-Oekonomik. S. 599.）。言ふまでもなくゲッチンゲンはハノーヴアから英國に入つたジョージの領地で、一七三七年そこに建てられたゲッチンゲン大學は英吉利の影響を受けること最も深く、永く獨逸思想界にその跡を留めてカントに及ぶと稱せられるところである（C. W. Hasek: Introduction of Adam Smith. p. 60-61 參照）。

クリスチャン・ガルヴェ Christian Garve の Untersuchung über die Natur und Ursachen des Nationalreichtums von Adam Smith ... Aus dem Englischen der vierten Ausgabe neu übersätzt. Breslau, W. G. Corn, 1794-76. 第一卷は一七九四年出版された。これはロッシアーが「スミスの國富論の最初の良譯、同時に一般的に第二の翻譯（獨逸での）」と稱するものである（W. Roscher: Geschichte. S. 603.）。彼はゲッチンゲン大學の人でなかつたが、夙くから蘇蘭學派に注目し、既にフアグスンやバアグ、J・マックフアランの翻譯があつた。彼がスミスの書を知つたのはシラア譯によつたのである。彼はそれを序文で言つてゐる。「初めて現はれた國で高い名聲を博し、議會で國家經濟の問題の討議の際、互ひに反對する政黨双方からその主張の重みをつけるためにその章句を引かれる本書は、吾々の間でもまた一七七六年以來翻譯によつて既に知られてゐた。私はこの翻譯で初めて本書を知つたのである。そしてまたそれによつて、私の全研究生活の間殆んどの著者からも受けたことのないやうな強い印象を、その研究本來の對象だけでなく、市民的、社會的生活の哲學に關する事項に就いての幾多の新見解から受けたのであつた。」（Vorrede des Uebersetzer. S. ii-iii）。しかし彼れをして第二の翻譯を決心させたのは「それだけ讀んだのでは殆んどわからない」シラア譯の拙さであつた。彼は一七九一年三月ワイセ Weisse に宛て、「スミスの國富に關する書物は、近來の古典的著作の一だと思ふ。獨逸譯はそれだけ讀んだんでは殆んどわからない惡譯だ。だからも一度譯してもいゝだらう」と書き、同じ年

の八月二十八日に「コーン（出版書肆）がスミスの國富論の新譯を引受けると言つてゐる。私も本書を高く評價してゐるのだから寧ろやつて見たいと思つてゐる」と知らせて居る（C. W. Hasek: Introduction of Adam Smith, p. 68. note 3.）。シラアの「譯」も飛んだところで貢獻を爲したものと言はなければならない。翻譯はその年のうちに着手され、十二月にはその第一卷牛ばを終げた（Ibid. p. 69.）。しかし彼は本來哲學に興味をもつものであり、スミスの場合も初め蘇國學派哲學者の一人として著目したのであつたから、助手として文體相似たアゥグスト・デェリェン August Dörrien の援助を藉り（Ch. Garve: Vorrede des Uebersetzer. S. vi.）、一七九四年第一卷及び第二卷、九五年第三卷、そして九六年に第四卷を出して翻譯を完成した。デェリェンは第二版で、兩人がその原稿を互ひに通讀し、修正した箇所を通知し合つたこと、第四卷に誤譯が見出されるならばそれは主として自分の責任であることを述べてゐる（Vorbericht zu der zweiten Ausgabe der Uebersetzung. S. vii.）。本翻譯は一七九九年にデェリェン序文及びステュワートのスミス傳を附して第二版三卷本（Breslau und Leipzig. W. G. Corn）が出され、一八一〇年に第三版（同じく Breslau und Leipzig, W. G. Corn）が公にされた。またこれとは別に一七九六—九九年の四卷本（Frankfurt und Leipzig）及び一八一四年三卷本（Wien, B. P. Bauer）がある（H. B. Vanderblue: Adam Smith and the "Wealth of Nations." 1936. p. 8.）。

また一八〇六年にG・ザルトリュウス Georg Sartrius. による國富論の要略本が、一八一二年にはF・V・ケルン Friedrich von Cölln のそれが出版された（Ibid. p. 8.）。（註一）しかしその後可成り長い間スミスは顧みられなくて、一八四六—四七年に至つてマックス・スティルナー Max Stirner の翻譯が「佛英經濟學者」叢書 "Die National-Oekonomen der Franzosen und Engländer." Bd. 5-8. の一部としてライプツィヒから出た。（註二）この時期は中央歐羅巴はメッテルニッヒが權勢を振ひ、自由思想が全く影を潜めてゐた時代であつたのである。その後一八六一年にW・C・アシャ W. C. Asher の譯 Ueber die Quellen des Volkswohlstandes. が、一八七九年にはヴィルヘルム Wilhelm Loewenthal の譯（第二版一八八二年）が、また一八七八年にはF・シュテーペル F. Stöpel の譯が出た。シュテーペルのそれはプラーガー Robert Prager が訂正を施して一九〇五—〇七年に再版を出した。一九一〇年にはシュミット Heinrich Schmidt がキヤナン版の翻譯を出し、一九二二年にF・ビュロー Friedrich Bülow が新註を加へた新版を出し翌二三年に Kröners Taschenausgabe に組みいれた。

註一　ザルトリュウスのものは Von den Elementen des National-Reichthums, und von der Staatswirtschaft, nach Adam Smith. Zum Gebrauche bey akademischen Vorlesungen und beym Privat-Studio. Göttingen, 1806. である。是れより先彼れが一七九六年に著した Handbuch der Staatwirschaft, zum Gebrauche bey ackademischen Vorlesungen, nach Adam Smith's Grundsätzenausgearbeitet. Brl. 1796. の小篇も國富論の摘譯に外ならなかつた（W. Roscher: Geschichte der National-Oekonomik. S. 615-16; C. W. Hasek: Introduction of Adam Smith's doctrines. p. 72-75.）。ケルンのそれは Die neue Staatsweisheit order Auszug aus Adam Smith's Untersuchung über die Natur und die Ursachen des National-Reichthums. Berlin, 1812. である（H. B. Vanderblue: Adam Smith and the "Wealth of Nations." p. 12.）。猶は同種のものとしては、リュウダー August Ferdinand Lueder の Uebernationalindustrie und Staatwirtschaft. Nach Adam Smith, bearbeitet. Berlin, 1800-02. クラウス Christian Jacob Kraus の Die Staatwirtschaft von Christian Jacob Kraus. Nach dessen Tode herausgegeben von Hans von Auerswald. Konigsberg, 1808-11. が擧げられる（W. Roscher: Geschichte. S. 609, 619.）。

註二　本譯は最初假綴分冊の形で、その第一卷は一八四六年にこの叢書の第九、第十分冊として、第二卷も同じく四六年に第十一分冊として、第三卷及び第四卷は四七年にそれぞれ第十二、第十三分冊として刊行された。

佛蘭西、丁抹及び獨逸を外にして、伊太利譯は一七九〇—九一年ナポリで出版された Richerche sulla natura, e le cagione della richezza delle nazioni. Tr. per la prima volta in italiano dall'ultima ed. inglese. 一八五一年トリノで出された、マカラック版に據る Ricerche sopra la natura e le cause della ricchezza delle nazioni... Traduzione eseguita sull'ultima ed. inglese del sig. MacCulloch, preceduta dalla vita dell'autore, del sig. V. Cousin 及びA・ロリアによる新譯 Richerche sopra la natura e le cause della ricchezza delle nazioni. Con prefazione di Achille Loria. Torino, 1927. がある。西班牙では國富論は初め「その文體の低劣と德性の放肆」の故に禁壓されたと傳へられる。といふのはジョン・マックファソンが一七九二年この國を旅行した際に、教會の戸口にこの禁告文が貼られてあるのを見たやうにギボンに報告してゐるのである(Gibbon's Miscellaneous Works. vol. ii. p. 479.)。しかしこの禁は間もなく解かれたものと見え、一七九四年にはJ・A・オルティツ Josef Alonso Ortiz の Investigation de la naturaleza y causas de las riqueza de la naciones. La traduce al castellano el lic. d. Josef Alonso Ortiz, con varias notas é ilustraciones relativas á España. が上梓され、一八〇五—〇六年に重版された。また近く一九三三—三四年には現代風に改譯されて出版された(The Vanderblue memorial collection of Smithiana. p. 31.)。なほこの外夙しものには和蘭の Nasporingen over de natuur en oorzaaken van den rijkdom der volkeren, zevolgd naar het Engelsch... door Mr. Dirk Hoola van Nooten... Met staat-en geschiedkundige aantekaningen. 1 deels... Amsteldam 1796. があり、瑞典では一七九九年の Läsning i blandade ämnen. (Stockholm) 誌に抄譯が載つた(Ibid. p. 23, 32.)。

國富論が初めて露西亞に移されたのは一八〇二—〇六年に過ぎないが、この國にスミスの思想が紹介されたのは、非常に夙かつた。一七六〇年代に青年を外國に留學させる風が汎くこの國に行はれた。一七六一年モスコー大學の命令でグラスゴーに學んだS・J・デスニトスキイ Simon Jefimovich Desnitsky 及びI・A・トレチアコフ Ivan Andreevich Tretiakov もその一人である。ともにグラスゴーで哲學及び法學の學位をとつて一七六七年歸國した。この二人が初めて露西亞の大學にスミスの學說を紹介したのである。しかし彼等がスミスの敎へを受けたのは比較的短期間であつたと言はなければならない。蓋し二人は一七六一年グラスゴーに到着し、スミスは六四年一月に佛蘭西に旅立つてゐるのだから。トレチアコフの方は割合夭く死んだからその學問上の業績は少い。僅かに三つの公開講演が殘つてゐるだけである。しかし一七七二年六月三十日モスコー大學の講演會で行つたものは、スミスの講義に基いてゐることが明かであつて興味が深い。題は「豐富の原因と古今に於ける諸國民の國富漸增を論ず」である。そのなかでスミスの所說の本質的のものが簡單に述べられ、しかもその例を引いて說明してゐることは特に注意に價する。「假りに時計製作者または針のやうないたつてつまらないものの製造人でも、それ等もしくは同樣なものの完成に必要なすべてのものを自分で製作するとしたら、一年に時計一個、一日針一本を作ることさへ難しい。」(Speeches delivered at the official meetings of the Imperial Moscow University by the Russian professors thereof, containg their short curricula vitae. Moscow, 1819. p. 328. quoted from W. R. Scott. Adam Smith as student and professor. p. 425.)。この類似は勿論トレチアコフがスミスのグラスゴーに於ける講義を祖述してゐることに因るものであるが、また彼の恩師がその頃既に後の大著の一部を準備しつつあつた一つの證據でもある譯である。實際スミスが一七五〇年代といふ夙い頃に既にその法學講演で經濟思想の片鱗を示してゐることは、別に述べた通りである(本誌第三十四卷第九號小稿『アダム・スミス書誌』二九頁)。トレチアコフのこの演說が、國富論の公刊四年前に行はれたものであることは驚いていい。彼は國富論のでた年(一七七六年)に大學を退き、七九年に死んだ。

デスニトスキーが扱ふ問題の範圍はトレチアコフよりも廣い。それ等はアダム・スミスの名と直接の繋りがない。「その對象の撰擇にデスニトスキーは全く獨立であるやうに見える。而し研究方向をアダム・スミスに藉つてゐることは疑ひない」と同國人は言つてゐる（N. M. Korkunov. The history of the philosophy of law. St. Petersburg. 1898. p. 295. Quoted from W. R. Scott. Adam Smith as student and professor. p. 426.）。彼れはモスコー大學にローマ法、ロシア法學の講座を擔任し、二十年在任の後一七八七年退隱し、八九年スミスに一年先立つて逝いた。彼れは大學の公開講演の一つで、一部の人々の他に對する支配力は、（一）その肉體の優越、（二）その心性の優越、及び（三）その富と豐富に基づくものである。「しかし主として人に名譽、威嚴及び優越を與へるものは、その富と豐富の優越である。このことは新道德哲學の勝れた著者スミス氏が、最早や說明を加へる必要がないほどよく說明してゐる」と說いてゐる（W. R. Scott. Adam Smith as student and professor. p. 426.）。

國富論は前にも一寸觸れたやうに一八〇二―〇六年にN・ポリトコヴスキー N. Politkovsky によつてIzsliedovanie svoistva i prichin bogatstva narodov 四卷本として完譯された。政府はそのために譯者に五千ルーブルの補助金を與へたのである（bid. p. 424.）。またそれは近くは一九三二年 Institut K. Marksa i F. Engel'sa から新譯が出され、三五年に再版されてゐる（Vanderblue memorial collection）。また近來では土耳古に比較的古く一八八一年に出された Sakishi Ohanes の譯があり（H. B. Vanderblue: Adam Smith and the "Wealth of nations." p. 13.）、支那には光緒二十八年（一九〇二年）刊英倫斯密耳（スミス・アダム）丹原本、侯官嚴復幾道翻譯の『原富』八冊があり、數度續刊されてゐる。「此譯に用ふるところ、乃ち鄂斯福（オウクスウォード）國學頒行の新本なり。羅哲斯（ロジャーズ）の斠閱するところ」と序文（光緒二十七年八月十六日の日附がある）にあるから、一八八〇年のロジャース版の第二版にでもよつたのであらうか。第一篇の最近四世紀間の銀價の變動に關する餘論、倫敦麥價表、及び第四篇第三章のアムステルダム銀行に關する餘論を要約または省畧したことを言つてゐる（譯事例言四丁）。またこの外に王亞南等譯「國富論」、劉光華譯「國富論」の二譯があるといふことである（「三田評論」昭和十七年六月遊部久藏「支那輸入經濟學の特質と背景」一二頁）。

四

アダム・スミスは抑々わが國にどんな經路を經て紹介されたか。それは、わが國では、經濟學の將來と一致する。蓋し古くから西歐との交通があつたとしても、その文物がわが國に本格的に輸入されたのは、幕末であり、またその頃歐羅巴の思想界を支配したのは、正統派經濟學であつたからである。

わが國に國富論を將來した最初の人は恐らくシーボルトであらう。一八六二年（文久二年）長崎出島の和蘭印刷所から出版されたシーボルト將來本目錄 Catalogue de la bibliotheque apportée au Japon par M. Ph. F. de Siebold pour servir à l'étude des sciences physiques, géographiques, ethnologiques et politiques et de guide dans les recherches et découvestes scientifiques dans cet empire. Dezima. Imprimerie néerlandaise, 1862. に、J・B・セイの『應用經濟學講義』 Cours d'économie politique pratique. Bruxelle, 1832.、K・H・ラウの『國民經濟學原論』 Grundsätze der Volkswirtschaftslehre. Heideberg, 1826 と、それから國富論獨逸譯 Untersuchungen über das Wesen und die Ursachen des Nationalreichthumes. Leipzig, 1846 の二卷が收錄されてゐる。この獨逸譯國富論が前述マックス・スティナーの第一卷及び第二卷であることは、その出版事項から見て疑ひない。註 そしてこれ等は彼れが一八五八年（安政六年）再渡の際もち來つたものと考へられてゐる。けれどもこれがわが國の人達の手に取られたとは思はれない。西周は文久三年に、統計學、法律學、經濟學その他に關し、「絕對に何事も日本に傳つてゐない」ことを斷言してゐる（木村毅『明治天皇と御治世下の人々』昭和十七年、三〇七頁）。原版將來の最も夙いのは、恐らく現靜岡縣立葵文庫に藏せられるマカラック編『國富論』の一八六三年の新版 An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations;

by Adam Smith. With a life of the author, an introductory discourse, notes, and supplemental dissertations. By J. R. M'Culloch, esq. New ed. revised, corrected, and improved. Edinburgh, 1865. であらう。本書には、「靜岡學校」の藏書印の下に、文久三年洋書調所から改稱せられた「開成所」の朱印があり、その傳來の古さを物語つてゐる（本誌、第三十六卷、七月號小稿「沼津版『經濟說略』」七三頁）。

註　シーボルト舊藏書のマックス・ティナ譯『國富論』は現在東京獨逸東亞細亞協會圖書室に保存されてゐるといふことである。――上田貞次郎博士紀念論文集、第二卷、『經濟の歷史と理論』、武藤長藏「西曆千八六十二年（我文久二年）長崎出島の和蘭印刷所（Ter Nederlandsche Drukkerij Imprimerie Nederlandaise）刊行 Ph. F. de シーボルト氏藏書目錄」三一一頁參照。

ではわが國で初めてアダム・スミスの思想に觸れたひとは誰れであつたらうか。先づ考へられるのは福澤諭吉先生である。先生は文久二年翻譯官として德川幕府の遣歐使節に從ひ歐羅巴に赴かれた際「チヤンブル氏教育讀本中經濟の一小冊子」を求め、當時「日本國中稀有の珍書」として愛讀して居られた（『慶應義塾紀事』『續福澤全集』第十卷所收、九九頁）。註一　これは チェーンバーズ兄弟 William and Robert Chambers が一八三五年に初めた「チェーンバーズ教育叢書」Chambers's educational course 中の一篇『經濟學』Political economy for use in schools, and for private instruction. London and Edinburgh. であつて（A dictionary of national biography. vol. IV. p. 28）。出版者等が「經濟學原理の知識が初等教育の一部門を形成しなければならないと信じ、その道のあらゆる方面に堪能な一著者の助力を得て」編纂した入門書である（Notice. p. iii.）。先生は幕府の外國方翻譯官として出仕せられた或る日、勘定方の有力な役人から本書の目錄の翻譯を需められて、コンペティシヨンといふ原語に競爭といふ譯字を造り出して「前後二十條ばかり」を譯して提出されたことがあつた。

その折この重役が爭といふ字が穩かでないと言ふので、「是れは何も珍らしいことはない、日本の商人のして居る通り、隣で物を安く賣ると云へば此方の店ではソレよりも安くしやう、又甲の商人が品物を宜くすると云へば、乙はソレよりも一層宜くして客を呼ばうと斯う云ふので、又或る金貸が利息を下げれば、隣の金貸も割合を安くして店の繁昌を謀ると云ふやうな事で、互に競ひ爭ふて、ソレで以てちやんと物價も定まれば金利も極まる、之を名づけて競爭と云ふので、ソレで却て商賣世界の大本が定まるのである」と說明を與へられた、といふことが『自傳』に物語られてゐる（『福翁自傳』岩波文庫版、一七六―一七七頁）。この記述には時日の記載はないが、私はそれを慶應三年一月先生の再度アメリカ渡航までの或る日と考へて居るのである（『歷史と生活』第五卷第四號、小稿「福澤先生と經濟學の移入」九―一〇頁參照）。慶應三年先生は『西洋事情外篇』にその前半すなはち「ソサイヤル エコノミー」に關する部分を譯載された。そしてその卷三三「經濟の總論」（原書には the nature of political ecor.omy）に「經濟學の旨とする所は人間衣食住の需用を給し財を增し富を致し人をして歡樂を享けしむるに在り。往古の碩學始めて經濟の事に付書を著し之を富國論と名けり」と國富論の名を擧げて居られる（『福澤全集』大正十五年版第一卷五〇八頁 cf. chambers's educational course. Political economy. 1870. p. 49.）。本篇に譯出せられなかつた後半「ポリチカル エコノミー」は、前に幕府の重役に差出された目錄の「前後二十條ばかり」に相當する部分である。それに就いては、同年神田孝平がウヰリアム・エリスの『社會經濟概要』William Ellis: Outline of social economy. London, 1846. 註二 を蘭譯から重譯した『經濟小學』と內容が略〻似てゐるといふので「分業の便利」に從つてこれに讓られた（同書四〇頁）。そしてこの讓られた部分に「分業と勞働組織」の節があり、そこに「アダム・スミスがピンの製造に就いて與へた叙述ほど分業の效用をよく說明するものはないと、スミスの文章が引かれてゐるのである（chambers's educational course. Political economy. p. 80.）。

註一　私がここに、先生が「チェンバーの經濟論」（先生は後に本書をから言つて居られる）を愛藉して居られたといふに止め

ないで、愛讀して居られたと言ふのは、先生が別の機會に「文久二年諭吉は又幕府の使節に從つて歐羅巴諸國を巡回し、……歸國の後は……英學の力も上達して」と言つて居られ（『福澤全集』大正十四年版、第四卷「三田演說會第百回の記」五七七頁）、また「歐羅巴より歸りて頗りに洋書を讀み」と書いて居られるところ等から言ふのである（石河幹明『福澤諭吉傳』第四卷「先生の遺文」、八二七頁。猶ほ同第一卷四一八頁參照）。

註二　本書とその著者に就いては、高橋誠一郎教授「日本に於ける經濟學の發達」（『學術の日本』第二篇、昭和十七年）一二―一四頁に詳しい。本書も「社會學の基礎的眞理は、わが國のあらゆる學校で教へられなければならぬ」といふ信念から、そこに「系統的知識」を注入するために試みた一個の入門書である。彼れはその序文で、經濟學は「言はゞ偶然に私の手近かに來たものである。私は若かつた頃のこの仕合せな出來事に遡り得る其の利益を認識してゐた。私は私を導いて私の研究に入らせ、それを續けてゆくやうに扶けて下さつた其の親切な、學殖ある完成した人達――當時は私には未知のひとであつた――に、今そうであるやうに、感謝の念をもつてゐた」と云つてゐる。この「感謝の念をもつた」といふひとが、ジェームズ・ミルであり、ヂョン・スチュアート・ミルであつたことは、彼が後年（一八七三年）『タイムス』に寄せた書簡に、「ジェームズ・ミル氏、また氏を通じてその令息に紹介せられたことをその「幸運」としてゐることによつて知られるだらう。――William Ellis: Outlines of social economy. 3. ed. enlarged. London, 1840. Preface to the third edition. p. iii; Alexander Bain: James Mill. a biography. London, 1882. p. 182. note.

福澤先生は慶應三年ウェーランドの『經濟要論』（一八六六年版 Francis Wayland: The elements of political economy. Fourtieth thousand. Boston, 1866. を將來せられた時には、先生の「上達した英學の力」を以つてしても、『初めは之を讀むこと頗る困難』とせられ「再三再四復讀して漸く其義を解」せられたのであつたが（『福澤全集』大正十四年版、第四卷、「三田演說會第百回の記」、五七七頁）、チェーンバーズの經濟書は、夙くからよくこれを消化して居られたことは、前記『自傳』の會話からも推察できる。しかしこの理解に先生は全く獨學で達しられたのである。わが國で初めて正式に外人教師に就いて經濟の講義を受けたのは、文久三年徳川幕府から和蘭に留學を命ぜられた西周及び津田眞一郎の兩人であつた。彼れ等は文久三年（一八六三年）十一月から（木村毅「明治天皇と御治世」。慶應元年（一八六五年）十月まで（三田學會雜誌、第三十五卷、第三號、小稿「津田眞道」一一〇―一一一頁）。慶應元年（一八六五年）十月まで（三田學會雜誌、第三十五卷、第三號、小稿「津田眞道」一三一頁以下參照）。ライデン大學のシモン・フィッセリング Simon Fissering に就いて、「政治學五科」の口授を受けた。政治學五科とは、（一）性法學、（二）萬國公法、（三）國法學、（四）經濟學、（五）統計學の五である。これ等の講義ノートは彼等の歸朝夫々の機會に翻譯され出版された。すなはち

西周助	萬國公法	慶應二年	津田眞一郎　泰西法學論　慶應二年
神田孝平	性法略	明治二年	津田眞一郎　表記提綱一名政表學論　明治七年

これである。けれども經濟學に關するものだけは國語に移されなかつた。で私は嘗て彼等が和蘭に留學した時、既にフキッセリングに「實踐的國家經濟學提要」Handboek van praktische Staathuishondkunde, door Mm. S. Vissering. Amsterdam, 1860 第一卷（一八六〇年）の著のあつたことを考へ合せて、經濟學に關する講義ノートの存在を一部疑つた（三田學會雜誌、第三十五卷、第三號、小稿、）。しかし其後聞くところに據れば、このノートは津田家に保存せられて、近く刊行せらるべき『津田眞道全集』に收錄せられる豫定であるといふことである。フキッセリングは經濟學者としては正統學派の流れを汲む自然法學の色彩の濃いひとであつた。津田家から慶應義塾圖書館に寄贈せられた『統計學概要』Groundbeginselen der Statistick のノートには異邦の留學生に對する「經濟學初步」De Beginselen der Staathuishoudkunde. の序文が收められてゐる。全文は次ぎの通りである。

國家經濟學は元來國家經濟の、すなはち國家がその財産、收入及び支出を最も有利に處理する仕方に就いての知識である。

二

第十八世紀の中葉、初めて經濟學原理樹立の努力の行はれた頃、それが則ちまた本來この學問の目的であつた。

三

けれども國家經濟のこの原理の研究によつて、國家の利益が國民の幸福と離つべからざるものであることが、極めて速かに明かとなつた。

四

人々は、一方に於いて、國家はその收入と財源とを國民の生産物から（特に租稅を通じて）抽き出し、また同樣に、より安らかな、より豊かな收入とは、國民がより繁榮を遂げ、その富からより多量の生産物を頒ち得るに比例して取得されることを知つた。

五

他方に於いて、國家自身は、特にその經濟の取り方と、國家が國民から生産物を徵收し使用する仕方によつて、國民の富と幸福に大なる影響を及ぼし得ることが知られた。

六

かくて人々は、國家經濟の法則に對する研究を益ゝ押し擴げて、また國民の幸福の源泉、及びこれに作用する有利または不利なる諸原因への研究を取り上げるに至つた（アダム・スミス）。

七

更に又一國民、及び有ゆる國民相互の社會生活は、地上に住むやうに、人間の本性にその起原を藉る、確乎たる一定法則に從ふことが明かである。

八

かくて國家經濟學は今や

一、如何なる自然法若しくは法則が人類社會を支配するか。

二、自然法發動の下に於いて、如何にして一國民の幸福が推進せられるか。

三、政府は、通商政策により、特に自然法への無智から、一國民の幸福にどんなに損害を蒙らせてゐるか。

四、從つて國家の支配、施政に當り、一國民の有ゆる仔細な點に亘り、有ゆる狀態に就いて自然法に注意を拂はなければならない。

ことを敎へる學問である。

九

國家經濟學は、だから、次ぎのやうに區分される。

第一、一般理論部門。そこではあらゆる國民の有ゆる社會を支配する自然法が研究される。

第二、特殊實踐部門。ここでは一定の國民に、またその國民が相交はる一定の事情の下に於いて、一般法と關聯して適用される法則が示される。

一〇

自づから先づ歐羅巴の社會狀態に着目せざるを得ない歐羅巴の經濟學者は、だから實踐部門では、日本人のやうな異邦人に多少不思議なものを取扱ふのである。

一一

けれども彼等自身も亦自づから、あらゆる社會、有ゆる國民に差別なく適用する一般自然法の研究に勤しまなければならない、何故なら、この法のうちに有ゆる國家經濟學の原理が發見されるのであるから。

一二

吾々の講義は、かの一般法若しくは原理の研究に限らなければならない。」

この序文にも見えるやうに、彼等もまたアダム・スミスの思想に觸れた最も夙い人達であつたのである。

わが國で經濟學が講ぜられたのは、慶應義塾をもつて嚆矢とする。西、津田の兩人が歸朝（慶應元年十二月二十九日）。後間もなく前職を襲つて開成所教授手傳に任命せられ、續いて教授職に陞せられたが（津田道治『津田眞道』昭十五年、九七頁）、文字通りに東奔西走し、また本郷の聖堂に「洋譯之科」開設の企てもあつたけれども、彼等が和蘭から將來した書物も「開封被吟味候樣之惡法」を歎かれたほどであつたから、ここで西洋經濟學の講義が行はれたとは思はれない（津田道治『津田眞道』一〇一頁）。開成所で讀まれたものは、多くは物理、本草學の類であつたといふことである（『福澤全集』大正十四年版、第四卷、「三田演說會第百回の記」）。福澤先生は慶應三年再度アメリカ渡航の際ウェーランドの『經濟學要論』（一八六六年版 The elements of political economy. Boston, 1866.（第四版の複刻。初版は一八三七年である）「數十部」を購つて歸朝、自身講義せられた。慶應四年四月、慶應義塾が鐵砲洲から新錢座に移つた當時の授業日課表には、「一　ヱーランド氏經濟書講義　福澤諭吉　火曜日　木曜日　土曜日　朝第十時、ヨリ第十二時迄」とある（『芝新錢座慶應義塾之記』慶應四年四月　日課」表）。同年五月十五日上野、彰義隊戰爭の當日は恰も前記ウェーランド講義定日に當り、先生は「丁度あの時私は英書で經濟の講釋をして居ました」と言つて居られる（『福翁自傳』岩波文庫版一九四頁）。註一　フランシス・ウェーランド Francis Wayland は一七九六年紐育に生れ、一八六五年に死んだユニオン・カレッヂ出身の僧侶であつて、一八二七年二月ブラウン大學の總長に就任し、その學制を改革してこれを隆盛に導いた、彼は教場から教科書を驅逐し、現代語、歷史、經濟學、自然科學の諸科目を增加して大學の課程を豐富にし（Theodore Collier: Wayland, Francis (mar. 11, 1796-Sept. 30, 1865. In "Dictionary of American biography." ed. by Dumas Malone. New York, 1936. vol. xix. p. 559.）、彼自身心理學、經濟學、倫理學、その他關係科目の講義を行つた（Richard Howlett: Wayland, Francis (1796-1865) In Palgrave's dictionary of political economy. ed. by Henry Higgs. London, 1926. vol. iii. p. 660; Edwin R. A. Seligmann: Essays in economics. New York, 1925. p. 139.）『經濟學要論』はこの講義を基礎とするものである。彼は一八四〇年第三版への序文で、本書が「過去數年間ブラウン大學第四年級に行つた經濟學講義を主內容とする」ものであることを言つてゐる（Preface. p. 111.）。本書は固より經濟學史上重要な地位を占めるものでなく、何等斯學に附加へるところのないものであつたが（Richard Howlett.）、この國で教科書の形で經濟學を說いた最初の書でもあつたから（The elements of political economy. By F. Wayland. Recast by Aaron L. Chapin. New York. 1881. Preface. i.）、それは初めから夥しい賣れ高を示し、三十年間に五萬部も捌いたと傳へられ（高橋誠一郎教授『福澤先生傳』九七頁）、グニエル・レヱモント、トマス・クーパー等と共にアダム・スミス及びその祖述者等の所說をアメリカに普及する丈けの役割を果したのであつた（John Kells Ingram. A history of political economy. new. & enlarged ed. 1915. p. 230.）。セリグマンは本書が數十年間最も人氣ある經濟學一般入門書として行はれたことを言つてゐる（Essays. p. 139.）。猶ほ本書には、一八四〇年著者自身によつて作られた要略版 The elements of political economy. Obridged and adapted to the use of schools and academies, by the author. がある。

本書は可なり永く慶應義塾で教科書として用ひられたやうであるけれども、先生躬らこれを講ぜられたのは長い

期間でなかつた。註二だから全篇（四〇六頁）を通讀せられなかつたかも知れないが、『西洋事情』の出版に際し、チェーンバーズの後半の翻譯を「分業の便利」に從つて『經濟小學』に讓られた先生が、本書の第二篇第二節「分業に就いて」の講讀を省略せられた筈はあるまい。ウェーランドはそこでスミスの釘鍛冶の例をひき、最初の蒸汽機關に附添つて働いた少年工の例を引き、プロニイが『國富論』の分業の章に暗示を得てその數學計算に便宜を得た話を、バッベーシの『機械の經濟と製造業に就いて』Charles Babbage: On the economy of machinery and manufacture. 1832. London, p. 153 から引用してゐる。（p. 78, 79, 81-82.）。だからスミス及び『國富論』の名がわが國に於いて初めて慶應義塾の教場で語られたことは疑ひなかつた（三田評論第五三八號、昭和十七年十月）。

註一　慶應應四年十一月十八日慶應義塾に入門した永田健助は、「余が入塾の頃、先生はウェーランドの經濟書を講じてゐられたが、それも久しからずして濟み、次にウェーランドの修身書を初められた」と言つてゐる（石河幹明『福澤諭吉傳』第一卷、六三〇頁。）

註二　明治二年再版の『慶應義塾之記』附錄「日課」には「一　ウエーランド氏　修身論講義　福澤諭吉　水曜日　土曜日　第十時より」と變つてゐる。

アダム・スミスの文章は、明治二年に恐らく初めて直接に沼津兵學校で讀まれた。沼津兵學校は、何人も知る通り、明治維新の際駿河に移封された德川氏が舊臣中の優秀な子弟を軍職に養成して生活の保障を得せしめる士族授産の一方法として、また幕末に人材を内外に留學させて吸收した西洋文明を活用する一方法として、明治元年十二月に開設した洋式學校である。この學校では學生を資業生と本業生の二に分ち、資業生には外國語學として英佛の一科を課し、その最終課程で「萬國史　經濟說　大署」を修めさせた。明治二年刊行の小冊子沼津版『經濟說略』The compendium of political economy from the lesson book. Edited by Watanabe & Co. At Numads. Meigi 2nd. は恐らくその教科書として採用されたのであらう。積極的證據はないが、編者渡部一郎がこの學校の英學擔當の教授並であつたところからそう考へられるのである。本冊子に『國富論』から拔いた「分業」論の一節（Cannan's ed. vol. i. p. 13-14.）がある。これが前述「靜岡學校藏、マカラック編『國富論』の一八六三年新版から引かれたものであることは疑ひあるまい（本誌第三十七卷、七月號、小稿「沼津版『經濟說略』」七三頁）。本冊子は明治三年五月小幡篤次郎先生によつて『生產道案內』として翻譯せられた。その卷の下「骨折を分つ車」（分業）の章は『國富論』部分譯の最初のものとしなければならない。またそれは明治七年六月西村茂樹が改譯『經濟要旨』の名で文部省から出版された。そして兩者ともに明治十年に再版が出され、その際前者は、『經濟學入門一名生產道案內』と改題された（本誌第三十六卷、十月號七七—七八頁）。

『國富論』の全譯は明治十五年石川映作によつて企てられた。すなはち明治十五年四月から『東京經濟學講習會講義錄』第一卷から連載された『富國論原名「ウエルス、オフ、ネーションス」英國アダム・スミス氏著　日本　尺振八閲　日本　石川映作譯』がこれである。『東京經濟學講習會講義錄』は田口卯吉の主宰した「東京經濟學講習會」の發行するところである。彼れは明治十三年五月自宅に「經濟懇話會」を開き、後、大藏省銀行局の「銀行講習會」と合併して「東京經濟學講習會」を組織し（『鼎軒田口卯吉全集』第八卷、「鼎軒先生略歷及び年譜」一〇頁）、註一　十五年四月から「會員の翻譯せられたる書を冊子に編輯し、講義錄と題して毎月一號づつ發行し」（『東京經濟雜誌』明治十六年第一八二號、四三四號）、恐らく十六年十二月第二十一卷まで繼續した。譯者石川映作は福島縣河沼郡野澤村の產。明治十五年同會の出版委員となり、「講義錄」ではアダム・スミスの「國富論」の翻譯を擔當した。彼れは明治八年七月（五日）慶應義塾に入り（慶應義塾入門帳）、後共立學舍に學び、尺振八に就いて英書を講習した。彼れが「經濟學ヲ專攻セント決心セシハ實ニ此時ニ在」つたと言はれる。すなはち本翻譯の第

一篇に「尺振八閲の識語ある所以である（『東京經濟雜誌』第三一四號、五六七—八頁。「石川暎作氏校ス」）けれども必ずしもすべてその閲讀を經たのでない（『富國論』第一巻扉裏參照）。彼れは『國富論』第一編より第四編までを譯出した。しかしその頃（明治十八年八月）肺患に罹り翌十九年四月業半ばにして逝いた。で翻譯は嵯峨正作によつて繼承され、明治二十一年完成された。嵯峨正作は富山縣上新川郡東岩瀬の生れである。英學研究の經路は明かでないが、政治類典の翻譯がある。本書では第五篇「公債論」を譯出した（經濟雜誌社『大日本人名辭書』第七版、大正元年、八五五頁。『東京經濟雜誌』明治二十三年、第二十一巻、第五二四號、七五四頁。嵯峨正作編『日本史綱』巻下、小池靖一跋）。

本譯がどの部分まで『東京經濟學講習會講義錄』に連載され、そして如何なる經路を經て明治十七年六月—同二十一年四月の『富國論』三巻に完成されたか明かにされて居らないやうである。が私は次ぎのやうに考へてゐる。『富國論原名「ウエルス、オフ、ネーション」』は明治十四年四月『東京經濟學講習會講義錄』第一巻より恐らく明治十六年十二月第二十一巻に、第七章「貨物ノ自然價格及ヒ市價ヲ論ス」まで連載された。本講義錄は恐らく本號で廢刊となり、富國論は「從來講義錄ニ登錄セル後」假綴「凡そ十三冊（一冊二百ページ）」に分冊して刊行の豫定が樹てられ、十七年一月から着手された（明治二十六年十一月三十日發行『東京經濟學講習會講義錄』第二十、巻附錄「凡例」及び明治十八年六月「富國論覽要」上巻々末廣告參照）。しかしこの分冊は實際には十二冊で完成され、第一冊より第四冊までは明治十七年六月に、『英國　亞當斯密氏著　日本　尺振八先生閲　同　石川映作譯　富國論　第一巻』として合本刊行せられ、第五冊より第八冊までは、同十八年五月『英國　アダム・スミス氏著　日本石川映作譯　富國論　第二巻』として、第九冊より第十二冊までは（第九冊は明治十八年九月、第十冊は同十九年十一月、第十一冊は同二十年六月、第十二冊は同二十一年四月）それぞれ上梓（『富國論』第三巻奥附）、明治二十一年四月『英國アダム・スミス氏著　日本　石川映作、嵯峨正作分譯、富國論　第三巻』として合綴刊行され、ここにわが國に於ける國富論の完譯の完成を見た、と私は考へるのである。本書第三巻末には「本書ノ刊行モ漸ク今回ヲ以テ終リヲ告候……又曩ニ本書假綴第一冊ヨリ第四冊迄ヲ合シテ富國論第一篇トナシ第五冊ヨリ第八冊迄ヲ合シテ第二巻トナシ又今第九冊ヨリ第十二冊迄ヲ合シテ第三巻トナスベキニ付右第三巻ニ付スベキ扉並ニ目錄奥附ヲ左ニ付シ置申候」との「稟告」が附されてゐる。

この間明治十八年六月にその第四巻のみを抜萃、『富國論覽要』（上下二巻。下巻明治十九年十二月發行）。として刊行された。刊行の趣旨はその緒言に明かである。「初メ我ガ經濟學講習會ノ講義錄ヲ發スルヤ余、英人亞當斯密氏著ス所ノ富國論ヲ譯載セリ……爾來日ヲ積ム淺カラス　隨テ譯スレハ隨テ刊行シ今ヤ第四篇ニ及ブ　全書ノ譯了將サニ近キニ在リ　蓋シ第一篇第二篇ハ專ラ經濟學ノ原理通法ヲ講明シ　第三篇ニ至リテ漸ク事實ニ論及シ　第四篇ハ則チ前數篇ニ講明スル所ノ原理通法ヲ適用シテ悉サニ商制ノ謬妄ヲ排駁辯明スルモノニシテ社會ノ殷富ヲ進ムルノ要道ハ干渉保護ノ策ニ非ラズシテ自由交易ニ在ルノ理ヲ審カニス　實ニ全書ノ骨子ナリ　余譯ヲ迫フテ此篇ニ及ビ私カニ以爲ラク全書五篇ヲ通讀シテ能ク之ヲ翫味スルニ非ラザレバ悉サニ富國論ノ大旨ニ通ズルコト能ハズト雖モ其當世ヲ益スルノ大ナル復タ此篇ノ右ニ出ヅルモノナシ　能ク此篇ヲ熟讀翫味スルニ於テハ全書ヲ通讀セザルモ以テ保護政策ノ非ヲ悟リテ自由交易ノ社會ニ大利アルヲ知ルニ足レリ　惟フニ全書ノ鴻濟ナル或ハ購讀ニ不便ナルノ憾ナキニアラス今ヤ此篇ヲ拔萃シテ之ヲ公ニシ以テ購讀ニ便ナラシメバ其世益ヲ爲スコト蓋シ少ナカラザル可シ。」すなはち恰もこの頃その頭領田口卯吉は『東京經濟雜誌』に據つて犬養毅に對し「モルカンタイル・システム」を批判し、スミス流の自由貿易論を主張しつつあつた。彼れも本譯書によつて當時に於ける自由保護貿易論爭の一翼を擔當してゐたのである。註二

註一　東京經濟學講習會は後に（明治二十年）「東京經濟學協會」と改稱した（『鼎軒田口卯吉全集』第八巻、鼎軒先生路歴及び年

譜一〇頁參照。）

註二　田口卯吉は石川譯『富國論』叙でも重商論を批評し、「其通商雖レ在二於干涉束縛之下一、其發達實有下驚二耳目一者上。諸國執政者輙傲然自誇曰、國家致二今日一、皆我之力也、故當二千八百年代一、歐洲之商業、日進而干涉保護之弊益大矣、當二此時一、蘇國之人亞達母斯密士（エダムスミス）、觀二歐洲諸國之形勢如レ此、而嗟下執政者欲レ富二其民一而實害ふレ之、則欲下擊二破世之謬說一、而立二國家富强之大本一也、退居十年、悉徹二古今萬國治亂盛衰之所レ據、明下二國民所レ以致二殷富一之大本在一、自由通商之制、而不レ在二商制一之理上、以公二之干世一。」　玆遭二明治之昭代一、學術技藝、日進月盛、而獨至二論二國事一、世尚惑二干涉保護之謬說一。」と主張してゐる（石川啖作譯『富國論』明治十七年、第一卷、田口卯吉富國論叙、五―六頁。）

第二の全譯は遙かに後れて大正一〇―一二年に竹内謙二氏によつて試られ、第三は最近大内兵衛博士によつて企てられ完成近きに在る。この間氣賀勘重博士の『アダム・スミス國富論　上卷』が出たが未完の儘で殘されてゐる。石川氏譯以後の全譯及び部分譯を列擧すれば次の如くである。

全譯

竹内謙二譯『全譯國富論』三卷　大正一〇―一二年

同　改訂增補再版　第一卷　大正十四年

同　全訂增補第三版（改造文庫）昭和六―八年

氣賀勘重譯『アダム・スミス國富論』上卷（經濟學古典叢書）大正十五年

同　（岩波文庫）昭和二年

青野季吉『國富論』（世界大思想全集一二―一三）昭和三―四年

大内兵衛譯『國富論』（岩波文庫）昭和十五―年

部分譯

三上正毅譯述『アダムスミス富國論アシレー抄略』明治四十三年

同　七版　大正八年

永雄策郎譯『富國論』（アカギ叢書第九十八篇）大正三年

神永文三譯『富國論』（新學說大系第五卷）大正十四年